斜陽の社民　党首落選の危機／猜疑心の野党共闘／「民進には裏切られてばかり」

　参院選で社民党は、存亡を賭けた戦いに挑む。かつて「社会党王国」と呼ばれた大分県の社民党は今回、選挙区は民進党現職を支援し、比例は同県出身の吉田忠智党首の再選を至上命題とする。だが、社民、民進両党の、ぎくしゃくした歴史を背景に、がっちり握手とはいきそうにない。（中村雅和）

　「多少ぎこちないかもしれないですが、ともに頑張りましょう！」

　３月２６日、大分市内で開かれた社民党大分県連大会で、内田淳一県連代表がこう呼び掛けた。視線の先にいたのは、翌日に民進党「旗揚げ」を控えた民主党大分県連の小嶋秀行幹事長と、共産党県委員会の林田澄孝委員長だ。

　当時、中央政界で野党協力の話が進み、大分県でも民主、社民、共産が候補一本化を模索していた。

　内田氏からのラブコールに、笑顔で応じた林田氏と対照的に、小嶋氏の表情は硬かった。民進党県連幹部は「共産党アレルギーに加え、社民党さんとの微妙な関係がある」と解説した。

大分県の社民党は、全国的に党勢が衰退する中でも、一定の勢力を維持した。

　だが、平成１０年の参院選において、大分選挙区に民主、社民両党がそれぞれ候補を擁立した結果、共倒れとなった。以降、連合大分が仲介し、両党が国政選挙で候補を統一し、互いに支援する「大分方式」を採用した。

　参院選でみると、１３年と１６年に「大分方式」が成立し、１６年は民主党の足立信也氏が当選した。

　だが、１９年の参院選で民主党が擁立を強行し、再び共倒れに。以後、候補者の競合こそ避けたが、「緩やかな支援」や「自主協力」という、ぎくしゃくした関係が続く。

　今回の参院選大分選挙区では、民進党現職の足立氏に対し、共産、社民両党が支援を決めたが、こうした歴史が影を落とす。

　さらに、昨年４月の知事選で、民進党や社民党の対応は割れた。

　現職の広瀬勝貞氏に対し、社民党県連顧問で元首相の村山富市氏が支持を表明した。一方、元民主党衆院議員の釘宮磐氏には、自治労傘下の大分市職労などが支援に回った。

　結局、広瀬氏が当選したが、両党支持者の傷は癒えていない。

社民党には別の事情もある。同県を地盤とする吉田氏が、現職の党首でありながら、落選の危機にあるのだ。

　同党大分県連副幹事長の安部逸郎氏は「自民党を減らすことは大事だが、（民進の）『選挙をやらせてください』という状況ではない。とにかく地方組織として、党首の再選に全力を尽くす」と強調した。

　吉田氏は、大分県職労執行委員長を経て、県議３期を務めた。２２年の参院選比例代表で初当選した。今回、再選を期す。

　同じ改選組には福島瑞穂副党首という“ライバル”が存在する。２２年の選挙では、吉田氏の個人名得票数は約１３万で、福島氏の（約３８万票）の３分の１ほどだった。

　また、２５年の前回参院選で社民党の比例票は約１２５万票で、獲得議席は１議席だった。

　社民党は今回、吉田、福島両氏の２議席の死守のため、比例で２５０万票の目標を掲げる。だが、党支持率の低迷が続く中、吉田氏は窮地にある。

　この危機感からか、吉田氏は５月、党常任幹事会で「民進党との合流も一つの選択肢」と発言し、党内の猛反発を受けた。結局、１週間後に発言撤回に追い込まれた。

この吉田氏にとって、地元票が、再選を左右する。

　初当選時の吉田氏の約１３万票のうち、大分県で４万６千票をたたき出した。大分を含む九州７県の得票数は約７万１千票だった。

　吉田陣営は、労組票の獲得を目指して、九州各県に専任の担当者を置く。党福岡県連幹部は「大きな産別だと話にならない。単組に対して、粘り強く仕掛けていくしかない」と語った。

　吉田氏、大分の社民党は、野党共闘による比例への「見返り」を期待する。吉田氏も社民党が共闘の「接着剤の役割を果たした」と強調する。

　だが、見通しは暗い。

　民進党大分県連幹事長代行の福崎智幸氏は「地方には地方の事情がある。中央で手を組んだから、地方でも組むという簡単な話ではない」と語った。

　「共闘でわれわれがどれだけ譲っても、結局、民進党に裏切られるばかりだ」

　九州の社民党関係者からは、こんな恨み節も漏れる。野党共闘は、互いに猜疑心（さいぎしん）を抱きながら進む。

◇

大分選挙区（改選１）の立候補予定者

古庄　玄知５８弁護士　　　自　新

足立　信也５９元厚労政務官民　現

上田　敦子４９元銀行員　　幸　新